

到着するや否や、忽ち數多の商人及物贖ひ等の群集するは、別に東洋と異なる所を、十五日午後一時頃同所出帆し、十六日午前七時頃、エルバ嶋を左に臨み、同日午後三時頃、グノアに到着致候。小生は茲にて船を下り、直ちに停車場に至り、午後六時四十五分發の急行列車にて出發致候。マイランドに至りし頃は既に日は暮れ候。よつきシユヴァイツ國の壯景を見るを得ざりしは、實に遺憾に有之候。然し當日は雨天に有之候。ひし間晝間經過しても餘り違ひなかりしあらんと存候。十七日午前七時頃には、早や同國を經過し、獨逸國に入り、同午後六時半頃、フランクフルト、アム、マイン府着茲にて五時間停車致候に付、瀛車を下り散歩を試み候。同府は獨逸屈指の大都會あるにより、市街は甚だ美麗に有之候。特に同府の停車場は歐洲第一と稱せらるるモノにして、其廣大あると諸事の整備せるは實に驚くべきものに候。午後十一時十五分頃、同所發の瀛車にて十八日午前十時半頃、伯林府到着致候。

右は小生の道中の大略に御坐候。急ぎ認め候につき、不充分なる所も、あり又讀み難き所も有之べくと存候。御判讀被下度奉願候也。謹言

明治二十七年一月

大瀨 甚 太郎

龍南會々員諸賢御中

### 魯 韓 蹈 踏 雲 錄

(承前)

助教授

矢津 昌 永

八月二日、夙に起き出發の豫定あり、余の腹痛未だ止まず、僅に扶けて馬に上り、温井を發す、途、東萊府の郭外を過ぐ、府使代々の紀念碑……「府使某公万世不忘之碑」と題するもの、市端に建立すること少からず、聞く、府使交任する毎に、土民一々、之を建つ是れ眞に敬慕の誠意より出づるものにあら

ず、例の諂諛的標識たるに過ぎずと云ふ、但紀念碑を建つるは當府のみに限るに留らず、余等の過ぎたる所にては、府市は勿論、村落に於ても、多く見る所あり、左れば、朝鮮古慣の一流行物ある乎、又府中所々に、イヤに彩色したる小堂、荆叢の裏にあるを見る、之れを廟と云ふ、當國にては、廟に蠶廟、厚廟、塋廟の別あり、蠶廟とは、諸神を祭るものにして、厲廟は、惡鬼を祭り、塋廟は有徳の君子を祭る所ありと謂ふ、是れ只儀式的に止ると見へ、祠道草深くして人の吊ふもの、或は又孝子某碑、或は節婦某墳の如きも、往々、村市の端、叢深き所に於て見ることあり、所謂、門閭に旌表するものあらん、知らず韓の孝子節婦は、放屎累々の裏快く、瞑するや否

是より順路、古館、草梁を過ぐ、草梁村に於て、朝鮮の學校を見る、庭上に蓆を敷き、韓童十二三名、之に座し、各々『小學』を我が習字狀大の、字に書きたるを持し、教師句讀を教へ、或は暗誦するものあるを見たり、是れ韓人の所謂、教。育。法。あり、而して『小學』は實に彼等が、理想上の徳義たるなり、之を過ぎれば、灣を隔て、遙に我釜山居留地の、塋壁の皎々たるを望む、數日來、韓民の茅屋、土壁を見こし後あるを以て、恰も大都會に入るの感あり、其愉快、實に謂ふべからず、遂に、大池の族亭に歸着し、一浴して葡萄酒を傾く、其味格別あり、腹痛亦癒ゆ

農科大學助教、津野慶太郎、同宿せりとて來訪せらる、氏は、曩に、余等着韓以前に、當港に着き、牛疫調査の爲め、洛東江を遡りて、密陽地方に赴き、一昨日、歸港し、明晚出港の東京丸にて、元山津に向ふと云ふ、是よ於て、其同志を得たるを喜び、同行を約す、午後五時、室田總領事、山座法學士、川上書記生來訪せらる

本日、當地發行の『東亞貿易新聞』に、雞林旭光と題し、我々一行に關する、記事を掲げて曰く『帝國大

學助教津野慶太郎君は、牛疫源因取調の爲め、密陽地方に出張の所、一昨々日歸釜、又地理地質研究の爲め、來韓中の、第五高等中學校教官、矢津昌永君、及兵庫縣中學校長、小森慶助君と、相伴ひ、來る三日、當港出帆、海路元山へ出發の由あり、と是れ我々の前途を悉くすものあり、故に茲に借用す、夜來雨あり

八月三日午前在宿當港の郵便電信局長、松村昇一氏、來訪せらる、午後、小學校長、武光氏、及内田訓導、來訪せらる、當國に關する、種々の調査、及教育に關する、事項を調査して惠まる、蓋し、曾て委囑せし所なり

本夕、室田總領事より、余等三名、晚餐響應の招待あり、午後七時、招きに應じて、總領事館に至る、今茲に、總領事館に付記すべし、抑々、我總領事館は、釜山港中、第一景勝の地を占め、龍頭山麓、綠松の間、聖屋巍立し、旭旗飄々たるもの、則ち是なり、樓上より一望するときは、居留地の瓦屋、目睫の間、集り、釜山灣は、新月形を以て浸入し、金波激瀾、大小の漁船、帆船、爰に浮び、絶影嶋、五六嶋は、恰も泉池に浮べる、盆石の如し、又室内には、日本固有の諸美術品、及種々の裝飾品を陳列し、頗る愉快あり、嚙席に移れば、主人、室田、總領事、瀨川、山座、川上の諸氏、座にあり、酒間種々有益の談あり、今其一二を擧ぐれば

朝鮮國歩の衰退せる原因、は種々之れあるべし、雖ども、其主なるもの二あり、一は官吏の貪婪にして、下民を壓制することあり、當國は、上下の別、非常に嚴にして、兩班以上の人士は、下民を壓すること甚く、之れが爲め、卑屈風をなし、進取、改良の氣象なきのみか、地方官等の貪婪ある、治下の人民に、稍々富有の聞へるものは、部下の巡吏を使囑して、強て罪を構へ、若くは冤に陥れ、忽ち之れを

獄に下して、嚴刑に處す、只之を免るゝの法は、既に慣例あることなれば、家人等は、家産を傾け、官吏に賄賂を贈るの一法のみ、斯の如くあるを以て、人々勞力して、畜積するの念あることなま、其一は、征韓の役、我兵の蹂躪、掠奪によるあり、此役也、前後七年に亘り、我兵及明兵の、韓地に入りしもの、無慮五十萬に過ぐ、到處、屠殺燒夷、財貨あれば悉く載せ歸れり、是に就き、一話ゆり、長曾我部氏の、富民洞を引き拂ふや、凡そ人民の一藝に能ある者は、皆載せ歸らんとす、是に於て、殘民等、哀願して曰く、公悉く我が能者を伴ひ歸る、吾々は只餓死あらんのみ、希くは吾々も伴ひ去れど、是を以て全村多く歸化せりと傳ふ、以て其一班を知るべしと、韓人は、獨り第二の原因を以て、貧弱の基とし、征韓に對しては、今に惡感を有すと云ふ

現今我日本人の居留地は、凡二百二十一年前、釜山より移せしものにして、輒近に至りて、居留人益々多く、狹隘を感ずるに至りまを以て、先年朝鮮政府に照會して、海面凡二萬坪を、日本人の手を以て、埋立てたり、是れ今の、入江町西南の地にして、殆ど我日本の所有地に異ならず、其他の土地も、無期限借地にして、之に向ては年々、五十圓の借料を拂へりと云ふ

其他雜談に刻を移し、充分に快を覺へ、又獻酬に厭さしを以て、將に辭して歸らんとすれば、玄關には宿より迎ひの爲め來りて、東京丸の拔錨、既に迫れりと言ふ、驚て時辰を檢すまば、既に十一時を過ぐ、匆々宿に歸り行李を理めて、東京丸に乗組む、東京丸は、郵船會社の所有にして、一千三百餘噸の大船あり、一ヶ月凡そ二回、薩摩丸と交代にて、元山を経て、浦盪斯德に定期往復するものあり

同船者は、余等三名、及第一國立銀行員、西川氏、元山貿易商(防殺事 件委員)梶山新介、葭瀬忠次郎の兩氏あり、外に、他等の客は、日本人十三名、洋西人四名、露人三名、支那人七十一名、朝鮮人三十名とす、乗客は、

毎回支那人を以て、最も多とす、故に支那人は、郵船會社第一の花客ありと云ふ、十二時拔錨す、此夜月明に、甲板に出づれば、涼風衣を吹き、亦夏熱のあるを知らず、且つ海上は、對馬海流に沿ふを以て、海波特に平隱あり

八月四日、朝八十四度(熊本八十一度)、曉起して甲板に出づれば、船既に江原道の沖を走る、有名なる鏡嶺の脈は、蜿蜒として南東に走り、南、太白山に連る、多くは櫛木なき禿山にして、間々矮樹の生ずるを見る、概ね花崗岩より成るが如し、山脈は相駢列したるものにして、著しく秀拔の峰あり、最高二千尺より千一三百尺まであらん、地圖によれば、高きは王城山、大關嶺等あり

江原道は、風景の勝あること、全國の最たる由にて、濱海の山間には、侍中台、望洋亭、叢石亭等、總て八ヶの名勝ありて、之を關東八景と稱す、山脈之急に海に迫り、海底頗る深きが如く、嶋嶼稀に、潮汐又甚だ少く、潮水清麗にして、名けて碧海と謂へり、大關嶺は、漢江の水源にして、其峽間は、舊來有名ある人參の産地ありしが、今は産額多からずと云ふ

海上は至て平穩あり、船員の言に、冬期の航海は、風波あれども、夏期は常に波を揚げずと云ふ、是れ對馬海流に沿ふて、馳するを以てならん、然れども温暖なる海流の爲め、屢々濃霧海面を掩ふて、航路辨せず、流笛の警聲を聞くこと頻あり、斯の如く平穩の航海あるを以て、人々愉快に海上の眺望を領し、毎食時には、必ず食堂に出で、食卓一人の欠席者を見す

八月五日、朝八十二度(熊本八十一度)、船既に威鏡道の沖にあり、將に永興灣に入らんとす、而之て、元山津(ツラン)も亦遠からず、是に於て、上陸の用意をなす、元山の港口には、嶋嶼散點して、水路數條に別れ、間々暗礁あり、曩に、魯國軍艦は、暗礁の爲め沈没して、今は漸く烟突、檣頭の水面より現はるゝを見るのこ、午

前七時、元山港内に投錨す、港内水深くして、大船も陸に近づくを得る良港あり、然れども、東京丸は、十二三町の所に止む、元山津は、後背に連岡を控へ、我居留地は、中央佳良の位地を占め、左は支那居留地にして、右は朝鮮人の茅屋の村あり、我居留地は、瓦屋白壁凡そ一百戸、藁を駢べて并列せり、將に上陸せんとすれば、細雨霏々として至る、聞く、當地は、既に數日來の降雨に去て、陰濕特に甚し、蓋し、此地の梅雨期ありと云ふ、故に細雨濛々として、密雲空を掩ふ、釜山にては、旱魃四十日に及び、而して此地は、陰雨連日とは、厩かの所にて、異なるものかな、直に上陸、福島屋に投ず、朝飯を終りて、領事館を訪ふ

領事館は、居留地の北、山に據りて在り、副領事、中川恒次郎氏、并に大木中村の兩氏に面會し、種々要件を委嘱して、正午、歸宿す、今中川領事の、當港に關する、談話一二件を記すべし

當港は、明治十二年八月の、開港豫約により、我國の爲め、開港したるものにして、今居留民七百名あり、支那人は三戸に過ぎず、貿易は、二十二年、防穀令以來、活潑ならず、是れ當港は、米穀輸出を主とすれば、第一に其害を被りたる所以なり、其他の輸出品は、牛皮、明太、海鼠、海草、烟草等なり、其内、牛皮は、日本に輸入すれども、其他は、概ね朝鮮の各港に輸入す、特に明太は、元山、北青近海ホクライエンに於て、夥く捕獲する、一種の魚類にして、之を乾して、慶尙、全羅に送り、韓民の儀式的、食膳には、必ず之を供ふるものあり

教育は、本願寺僧侶の手にあり、共立小學校一個あり、我居留民の、子弟を教育す、生徒六十名、學齡兒童と、大略就學すと云ふ

茲に元山津に就き、記する所あるべし、當港の位置は、北緯二十七度二十八分三十秒にして、陸中及

羽後の南端と、其緯度を同ふすれども、其氣候に至りては、寒暑の懸隔すること、釜山よりも一層甚し。是れ亞細亞内地に近づくによるなり、左に其寒暖の度を示すべし。

明治十九年		全二十年		全二十一年		全二十二年	
二月	零下十四度	零下四度	零下十度	零下九度			
七月	三十四度七	三十四度	三十四度六	三十四度八			

斯の如くあるを以て、咸鏡、江原兩道の沿岸、海面は、冬期氷結し、港を鎖すに至る。

居留地内には、郵船會社、郵便局、警察署、第一及第二百一銀行支店、及公園地の設けあり、公園地は、租界の南部にあり、園中に、雲母片岩、露出の巉岩ありて、頗る風致に富む、岩頂に、天照大神を祭る、園内には、高麗松多く、韓人は之を柏と云ふ、楓類、及楊等之に次で多し、楓は、其類多く、葉の大なるものは、羽扇を欺くものあり、且つ樹幹も數抱に及ぶものあり。

地質は概ね、結晶岩に属し、雲母片岩最も多く、輝綠岩、石灰岩等、之に次ぐ其走向は、北西より南東に走るを見る、而して北部、滿州境に至るに従ひ、漸次、高度を増し、遂に白頭山の高峰とある、白頭山は、鴨綠、豆滿、松花、三大江の水源にして、英人ヨングハスバンド氏等の、探險によれば、四圍尖峰を以て繞らし、其中心には、周回四里三十町の火口湖ありて、頂上は、海拔七千五百尺ありと云ふ、其四

近は、一般に火山岩よして、岩中に玄武岩あり、故に白頭山は、全く消火山なりと云へり。  
咸鏡道は、朝鮮最北の一道よして、元良哈オランガイ（魯領）に境し、道中の咸興府は、現王室ある、李氏、基業の地にして、朝鮮にありては、人質懍悍を以て聞ゆ、今の元山津は、古の永興にして、壬辰の役、清正の安城

(安)より、來り攻むるや、二王子既に逃れて、境城にありと聞き、鍋嶋、相良の兩將を留めて、永興を守らしめ、自ら輕兵を卒ゐて、鏡嶺に至り、韓克鍼と、海汀倉と戰ひ、大霧に乗じ、掩撃きて、克鍼を擒に、進んで鏡城に至れば、二王子既に、會寧府に逃れ去るを以て、馳せて會寧府に至り、遂に二王子を擒すと、傳ふる所、歷々本道の中にあり

此夜、流船の出港は、明後七日午前六時に、延期せしを報ず、蓋し降雨暫時も止まず、且つ風伯之に乗じて、船中の荷物、陸揚げを得ざるを以てあり、併し之れが爲め、氣温大に降り、午後二時に於て、七八度に過ぎざりし

八月六日、曉來雨脚未だ止まず、朝七時に於て、七十四度に過ぎず、少しく峭料を覺へ、遽に秋冷の襲ひ來りし之感あり、街上の、寂寥特に甚し、津野氏は、當港及此近傍に於て、調査の廉あるを以て、浦鹽行を止め、余等の歸途まで、當港に滞在することに決し、第百二銀行支店に、轉寓す

當港まで同船きたる、本港紳商 梶山新介氏、來訪せらる、氏は防穀令、被害運動委員にして、又被害の最も大なるものなり、今般償還金一件に付、我政府に請ふ所ありて、上京せりと云ふ、氏の言に、防穀令によりて、我商人の損害は意外に夥しく、直接に三十二萬八千圓なりと算定す、若し間接の損害を加ふるときは、蓋し五十萬圓に及ぶべしとなり、氏は久しく、朝鮮貿易商たりし、經檢よりして、曰く、日本人は、最も朝鮮貿易に適當せり、何となれば、我國民の性質として、歐米に向はんよりは、先づ寧ろ朝鮮貿易に従事し、貿易の懸引を悉知すべし、特に僅に一葦水を隔つる所なれば、假令、郷土に戀々たる、我邦人にて、モ此地に渡來することは、格別難しとせざるべし、又朝鮮によりて、我國益をなすことは實に夥し、現に、我國民の駐在するものにて、常に壹萬人に下らず而して、之れが資本金は、



五百萬乃至八百萬圓にして、之れに對する收得少なからず、且つ日本漁民の、朝鮮沿海の漁獵に従事するもの、又一萬人、而して其漁額、蓋し一百五十萬圓に秩々々、彼れ是れを合すれば、朝鮮の我國を利するほど、少なからざるを知るべし、外交上、豈に之を度外視すべけんや、云々、其他、雜談刻を移し、當港貿易に關する、調査の材料書類を貸與せらる。

朝來宿にありて、樓上より望むに、釜山と同じく、韓人の行商少からず、皆な日本語の觸れ聲を放てども、殆ど其意を解する能はず、釜山とは觸れ様も異なり、聞く朝鮮よては、慶尙、全羅、邊と、此の咸鏡とは、言語大に異なりと、余等外人の、聞く所に於ても、亦稍々異なるを覺ゆ、例へば釜山にては、船をペーと稱し、元山にては、ペーと云ふが如く、總て去聲なるが如し、此日細雨終日止まず、街上行人稀に、時々白衣の韓人、帽上に異形の油紙製の笠を戴き、來往するの狀は、古風とや謂はん、閑雅とや謂はん、奈良朝以前の風俗の忍ばれて、「イト」面白し。

東京丸は、明早朝、烏港に向け、出帆の豫定なるを以て、此晚本船に乗組むことに決し、午后五時、晚食を了り、小森氏と共に、津野氏の寓所なる百二銀行に至る、既にして、中川副領事來訪せらる、領事は、余等の寓所、福嶋屋を訪はれたれども、既に出立後なりしと云ふ、是に於て、行李を津野氏の寓所に押し、再會を約して相別れ、途、楳山氏を訪ふ、氏は船中用とまて、麥酒數罍を惠まる、直に本船に乗組む、時午后八時なり、此夜一天既に晴れ、星斗爛々夜涼頗る快なり。

八月七日、朝七十八度、(熊本八十度)曉起して曠望を取れば、右舷は茫茫として、際涯を見ざる日本海にして、水天一碧、波驚かず、左舷は近く咸鏡の沿岸を望む、後背を擁するは屏の如き、鏡嶺にして、翠峰青巒の裏、聖壁の皎々たるは、是れ元山津なり、眞に是れ一幅の活山水に異ならず、是れまで見たる、朝鮮

の山峰は禿山にして、或は岩骨露れ、頗る殺風景なりしが、元山近傍は、総て緑を以て掩はれ、間々森林あるを見る、是れ全く、地質の異なるによるべし、然れども、多く峻険にして、傾度二十七八度より、或は四十度にも及ぶ所あるべし、威鏡の山は、一見、其相を異にし、寒帯に類するを知り得べし、

彼れ是れと、視察の中、正六時に及び、船は運轉を始めたり、本船は速力十裡餘、浦盤までは三百二十三裡、凡そ三十時間を以て達すと云ふ、當港より、曩に沈没したる魯艦の水兵十一名、及士官一名、東京丸に乗組めり、前十一時、海面霧生ず、數々漁笛を吹いて進む、既よきて、霧亦霽る、鏡城并に兀良哈地方の群峰は起伏して怒濤の如し、是れ文祿の役、藤肥州の北征まで爰に抵り、遙よ岳を望み、懷郷の情に、思はず士卒をして襟を濕さしめ、所なり、抑々、當地は釜山を距る四千七百韓里、氣候寒烈、禽獸風土、亦其趣を異にす、英雄も爰に至りて、豈に一滴の涙なからんや、余等、今は漁船に眠り坐から之を見み、轉た今昔の情に堪へざりしあり

午後、豆滿江（或は圖們江に作る）吐口の邊を過ぐ、豆滿江の海口は、別れて兩派とをり、鹿島と稱する三稜洲を抱いて、海に入る、此島は、元と韓領なりしが、明治廿四年の頃、魯西亞は、之を占領したりとて、一時、世界の注意を惹き、世間の談柄となりしものあり、今聞く所によれば、既に、純然たる魯領に歸し了れりと云ふ

強國と弱國と、境界相密接するの結果は、尙ほ之れに止まらず、他に種々の現象を認め得べし、朝鮮咸鏡道北部と魯領との間には、兩國交渉事件少なからず、元來、魯國が朝鮮の北境より、漸次又手を着けて、南下せんとするは、蔽ふべからざる事實にして、其韓北より南侵する、第一の策略とて、圖們江涯の、韓民を自國に懷け、遂に魯化せしむる策の、實地に行はれ始めしは、今より二十八年前、朝鮮の

夫、饑饉の時あり、當時、魯領接近の韓民は、生活の道に就かんことを求め、争ふて國境を踰へて、西伯利に入り込みしが、其時は、恰も魯國が、滿州沿岸地方を收め、専ら開墾の策を、畫するの際なりしかば、彼等を魯化せしむる政策を、實行せしむるは、此時にありとし、ユルサコフ、プスロフカ近傍、肥沃の地を與へて、農具、牛馬等をも貸與し、以て生業を得せしめたり、此に於て、饑餓の韓民等は、相率ゐて、魯領より走り、爲めに咸鏡北部は、著しく人烟を減せり、抑々、咸鏡道の北部は、韓の極北境にして、氣候寒烈、地味礪確にして、生計よりは最も困難なるより、一たび生活に易き、地を得ては、再び歸ることを忘れ、加ふるに、北境の韓民等は、天然風土の然らしむる所、人質慄悍にして、魯民に似たる所より、魯領に投じたる韓民等は、魯民と厚く親和玄、現今、朝鮮接近にある、一萬有餘の韓民等は、大概、殆ど魯國に歸化せし有様なり、今日余等の浦搆四近に於て、見る所によも、洋裝、斷髮にして帽を戴き、其容貌の、酷た日本人に似たる人士の、徘徊するを見て、怪て之を叩けば、是れ則韓人の魯國に歸化したる者ありと云ふ。

而して、魯國の政策は、尙ほ之に止まらず、他の一方には、魯人が種々の物品を携へて、毎年、朝鮮北境に入りて、頻りに、韓民と通商し、次第に、韓民の歡心を收め來れり、斯くて、魯國南下の策は、着々歩を進めて怠らず、朝鮮政府に於ては、疾くより此事の、大害なるを憂ひ、北方の地方官よりは、武勇の人物を撰任し、國民の魯領に走るものを防制し、嚴罰を科せり、既に此程のことありき、魯領に在り玄、千餘人の者、歸國するや、地方官は、直に之を虐殺せたるが、中一人、僅に遁れて魯領に走り、魯國地方官に訴へたるに、朝鮮地方官の、所置は、大に魯國南下の策に、防害あるを以て、直に京城の魯國公使館に移牒し、魯國公使、ドミトレブスキー氏は、將に、外務督辦に向つて、嚴重の談判に及ぶと云ふ、豈

よ奇象からずや

晩餐後、露國の水兵等、甲板上に於て、樂器を弄し、唱歌の連唱を始む、其意を解せずと雖ども、始め其兩三曲を、謹唱するを見れば、想ふに、國帝の萬歳を祝し國家の隆盛を祈るものならん、嗚呼、彼等が忠君愛國の、赤心を涵養する素ありと謂べし、唱歌了れば、各々初めて笑顔を開て、舞踏を始む、其藝の巧拙は、全く躰と足とにあるが如し、而して中にも重もあるは、足の踏み方なり、兩手は背後に組みて、眼は遠所に着け、胸郭腹部は、前方に突出して足踏とす、一人了れば、直に一人之に代り、斯の如きもの數次にして、四人舞踏とある、内に日本婦人(醜業婦ならん)一人を加ふ、一高一低、其曲頗る妙あり、之を觀る爲め、船客盡く集る、英人あり、米人あり、魯人あり、支那人あり、韓人あり、其容貌より、躰格服裝に至るまで、各々異あり、之を見る方、却て奇觀なり、而して、最も余の感呼びしものは、日本人の矮小なることあり、何れの國人に比するも、概して短身あり、斯の如くして止まざれば、遂に、世界矮人の名を、博するに至らん、知らず大陸の山水、人躰に影響するや、否や、日暮を踏舞亦止む、即ち室に入り麥酒を傾け、日本海中、華胥の郷に遊ぶ

(未完)

## 文苑

### 和氣清謔論

梧園

笠間益三

孝謙帝寵遇妖僧道鏡。遂崇爲法王。大臣百官。拜趨於其下。殆如君臣然。又有阿諛之臣。希帝旨。佞道鏡意。發妖言。以動之。於是帝決意禪位。道鏡決意篡位。其危如一髮挽千鈞。當此